教草女房形氣

山東京山著

巻十

十九

へ13
3580
19

へ 13
3580
22 19

森先生著

洋算學ひな

一名早合點　全壹冊　伊藤嘉紋

此書ハ西洋筭術の緒ヲ敷キ記号九々加減乗除ニ至テ各その用法を懇ニ示シ次ニ問題各種を擧げ別ニ其答式を附録ス頗ル深切ニ手をかし教ゆるが如ク洋筭早合點の書なり

大学 図書 昭和 5.1.22 教養

教訓女房形氣十九編より始ム

毎日心不休
米を作ル
粒々皆
辛苦

聖人の教ハ父を天ハ
母を地ハ
子ハ
頭ハ冠
雲の上人ハ
手ハ
雲ハ

一日も
為居を
着ル
住皆地
出る物ハ
又世の中の宝
錢金も元ハ地より生ずる物ハ
萬物ハ長ル人間ハ天ハ
父の陽氣の
地
母の胎内ハ

米のふくらぐけ百姓ハ
ふくらく田の艸を

やどし母の精気みそなはしてより十月そなりて
めでたく生おとしたまふに地の稲の
たるをあひ粒々辛苦して米のなるがごとし
○さて日でりつゞきて田の水もかれ辛苦を
尽したる稲の枯かゝる百姓のなげき乳汁
ろそくして我が子の痩るを見る母のかなしさ
あはれ○法苑珠林とかの佛昏の中陰経と
いふ佛の経文を引て曰釈迦如来弥勒菩薩に
問あらく兒生まれて母の乳を飲ハ何ぞ弥勒
とゝたく曰乳をのむこの百八十斛あり母の食
する所の四分一をのむこの乳汁ハ千斛とや
れバ如来母の墓ハ千拝をなすべしと
ありもし母の恩を知ざるハ今の赤兒も三歳ハ
数八千八千日夜昼一合ずつの乳を飲とて三歳

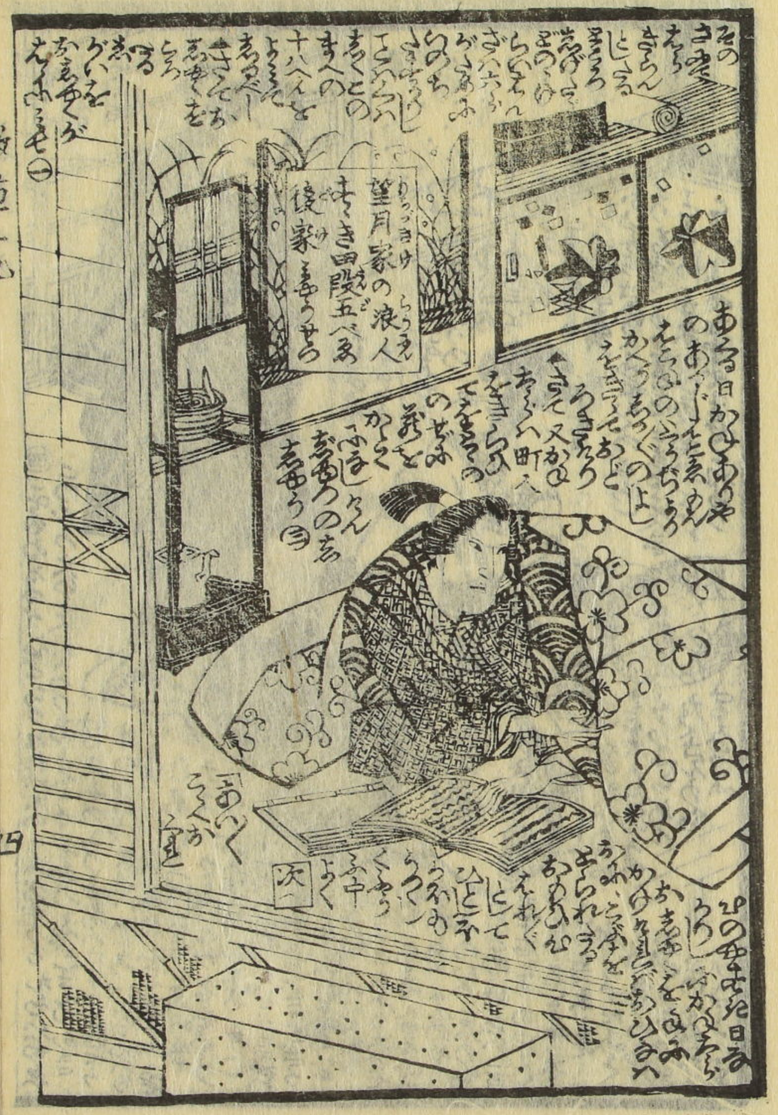
母のちゝ一石八斗をのむ此一ツを以ても母の
恩を知べし○乳子を育るに乳汁ハ
ゆゑ多くある家米に乳母をかゝえ
とあり乳家の母ちゝのみ
米の多くあるとあれ共此ごろハ母のかても
乏しく人みな痩ておとゝ昼ハ夜ハ
ふびんさ悲しさ乳をのゞざれバ
夜ハ泣くと更ハ明日ハ
ちゝもらぬ人門にかゝりたるまゝ
の声もひくげふ心づよひ今ハ

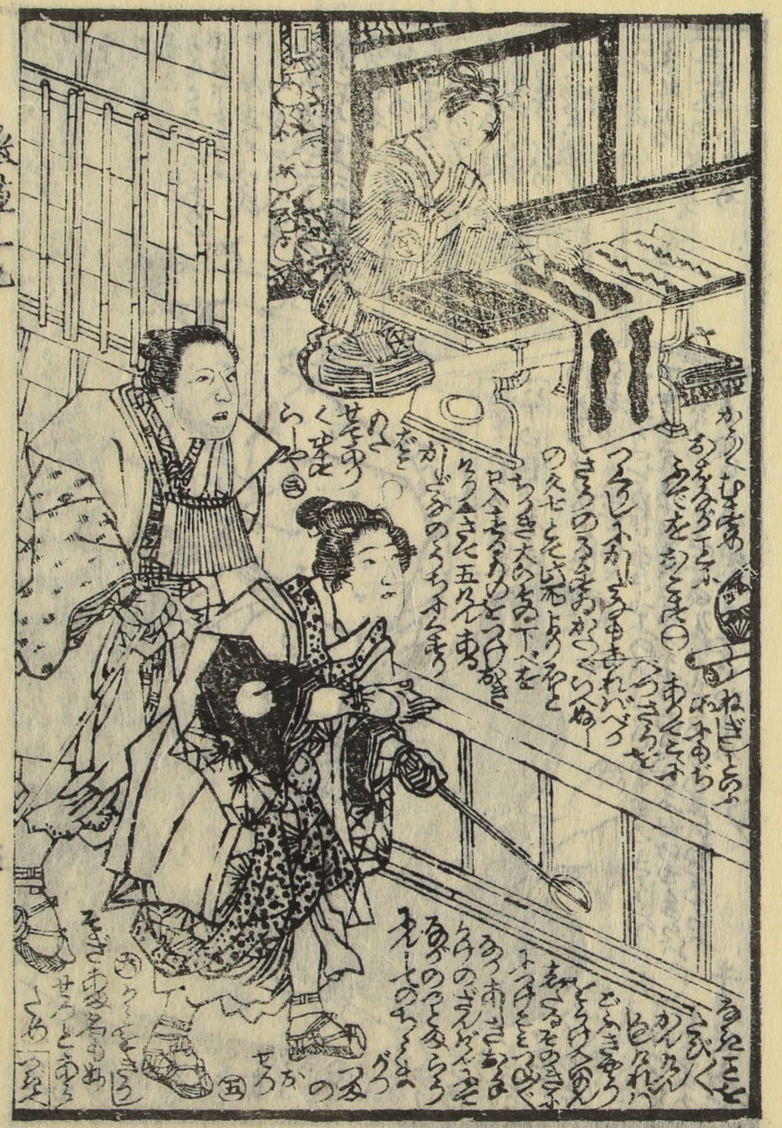
聞つけ戸口へたちもむかえ人雪のつめたさ身にしむ
かなしさとうとうたへ子のあるを親も
あるまじの夜の霍子のあるき
声の目をさまし「おやせさんく
今あけるよと内からこえかけられ
嬉しさとうれしさ子の間の夜
○母の子をそだてることかくのごと
なるべバ母の恩父のちからとも
なりぬべし然れども六七歳
出ぶバ母の手に育られ夫より父の義礼を習元服
娶り家督をつぎたるその日ゴロの負債
をさうさうあらみ一生の身をうるく父の恩なり
○万物の長たる人生まれつき孝行の孝の字も
まったく親のいろ少しも耳に入れ親のやぐ

友達のかたきいかみ子はおれをあなどり親へ
ゆえ義理をたてそ不孝同士中よくせよ又ふ親へ
宿ゆえ子をあれ子は遊里を親を忘れ
らうそくで多くよむづるのあり朝は食好しを米の道路を
親の脛みかぢりつけかぢる世間のむすこ百人よせて九十人ばかり
○さて又女地みたとえて陰ありしい静
静ありまづるのあり心やさしやさしく孝ふ
女の子ハ女同士ゆえ
○そのひとりの娘あり母ゆ孝を尽し十八
歳で母の敵を討たるこ此十九編の
華のつひぢゆ
水らくバ比しあさとものきゝ子の
通ゆ渡らんえーとをまろー

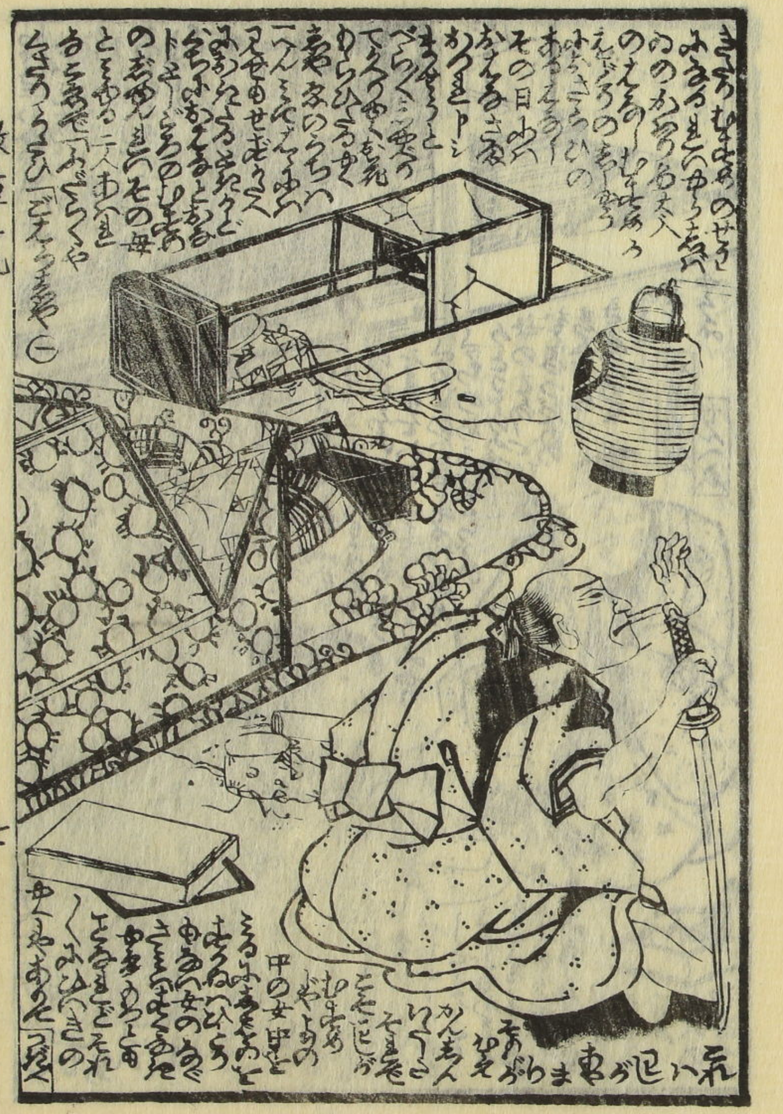
安政五年午
卯月廿五日
九十八羽京山

初段
孝女
あたま


望月家の浪人
後家
次



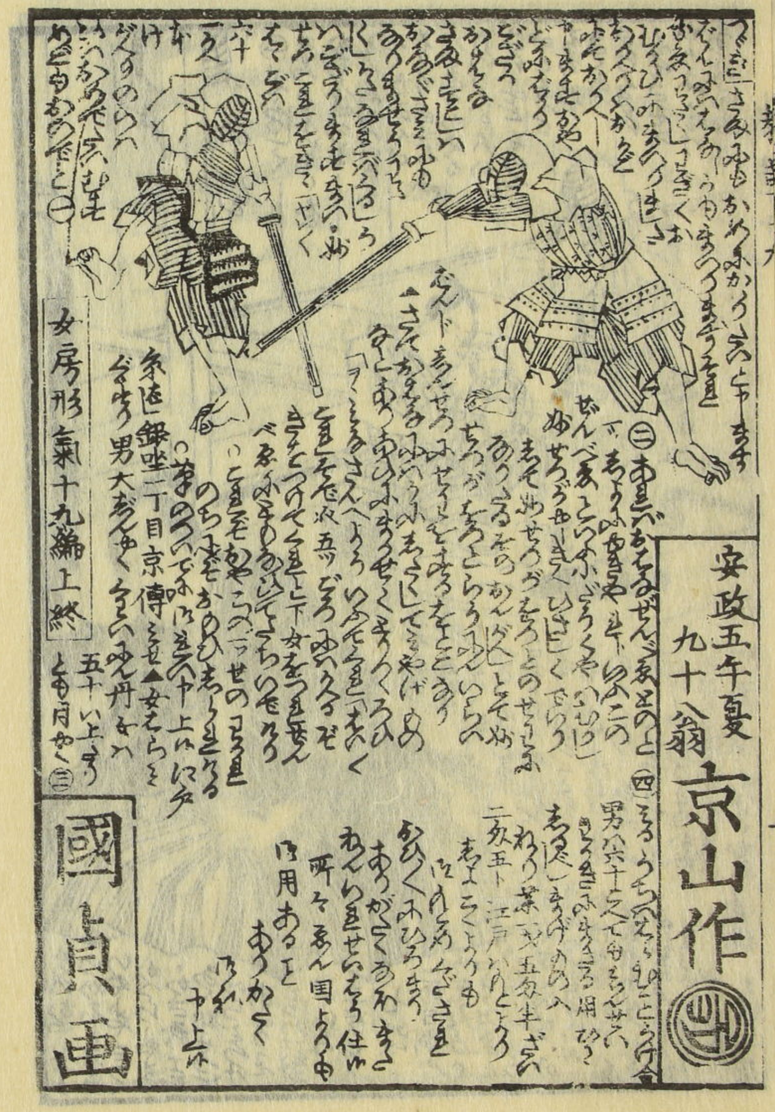
忠僕油助
三段
四段



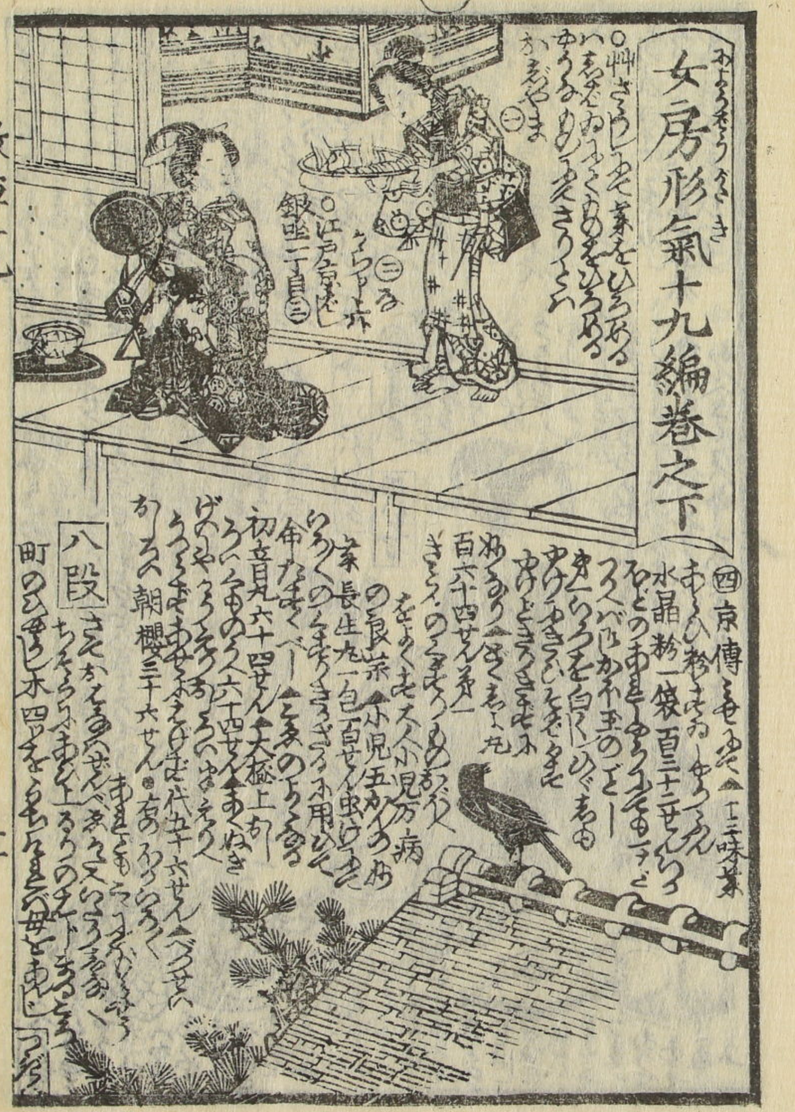
小道具屋
ぜんへあ

五段

今戸川の家
中母おろく
四六段
たびのあさろ
やどさぐりのひさまろ
武けの母
花中元のさろ



女房形氣十九編上終



女房形氣十九編巻之下

八段

今で川のかぢゆう
十段

九段
かね太郎

十一段
かく太郎
十二段
十三段

かく太郎

十五段
十六段

内でー
矣藏

其二

内でー
金五

かる太郎

かひる
あらひ
十六

かひ太郎
十八段
十九段
十七

井原垣藏
山中兵藏

世段

廿一段
高砂一曲
金吾

かく太郎

明治廿六年
東溪源黛校
考槃餘事 日紙摺明朝綴 本全四冊 文房賞鑑家必用之書也

題画詩則 全二冊

題画詩選 全壹冊

奥疑先生撰輯
書畫比目宜 鼠摺明朝綴 俵入本全三冊

書家必用の小冊諸君子常に手上に備置あるべき書畫の比目魚と称して絶分の佳品なり 数字を外に明かにして摺り出せり 其自在と得たりとす此書を抜きて必携掛易の珍寶とも可謂小冊なり

書肆 大阪北久寶寺町心齋橋 前川源七郎梓